

INSPIRE No.4

第9回GSGミーティング

日時：5月17日（日）

時間：12:00 - 15:00

場所：神奈川県川崎市宮前区鷺沼1-18-11ニューウェル206号

参加費：一般：3,000円/1家族

FP会員：2,000円/1家族

持ってくるもの：

茶色の袋に入ったランチ。



「ブラウンバック」

「ブラウンバック」とはちょっとしたミニ発表会です。茶色の袋に入ったランチを食べながら、お互いが練習している事を披露します。「練習している楽器」「練習しているスピーチ」「練習している空手の型」など、自分が取り組んでいる物事を共有してみたい子供募集です。ブラウンバックの良さは練習中のものを見せるという事で、決して完成してなくても良いという事です。一人の持ち時間は5分から15分。大人も練習しているものがあれば是非披露してください！その後、大人と子供が分かれてミーティングを行います。

連絡先：

ギフティッド協会事務局

office@jagifted.org



先日、第2回ギフティッド教育カンファレンス2015の基調講演にきてくださったスティーブ先生と湯西川の温泉に行ってきました。街をブラブラしていると源泉が流れてでている場所があり、歩きつかれた足だけをその温泉の中に入れてみると、手足を伸ばして茹だったカエルを見つけました。とても珍しくて、スティーブ先生と自分たちが置かれている状況・環境を話しました。茹だったカエルは珍しいのですが、珍しくないのは、自分のできる事ばかり、そして周りに認められる事ばかりをしている子供たちです。最近、子供たちが何かにチャレンジをして、失敗した事がありますか。快適ゾーンが広がる体験をしていますか。一番大切なのは、あなた自身が快適ゾーンを広げるチャレンジをして、子供とその体験を共有している事です。「大人と子供は違う。」又は「昔、子供の時にやったから、いまはやらなくてもいい」というような考えで快適ゾーンから飛び出すチャレンジを避けていませんか。子供は「昔の話」よりあなたの「今の話」が聞きたいのです。

さあ、新学期がやってきました。子供たちは新しい自分の一面と出会う準備はできていますか。

「今学期、どんなチャレンジをするか。」

「今学期、自分の素晴らしさを表現できる機会は」

「今学期、どんなお祝いをするか」

今学期はどんな冒険になるのでしょうか。ワクワクですね。

第4回 本の中のメンター

私は毎朝「新井白石」に会っている。といっても歴史上の人物に会える訳もなく、トイレで「折たく柴の記」を読んでいるだけである。

中学生の時から「新井白石」という人が江戸時代にいたことは知っていた。しかし、その時は「同じ苗字の有名人だけど、絶対自分とは血が繋がってるはずがない」と思っていた。しかし、最近自分の先祖がどこから来たのかを調べるうちに、もしかしたら血が繋がっているかもしれないと思う様になった。もちろん確証はない。

「折たく柴の記」というのは新井白石の自伝である。原文ではとても読めないの、現代語訳の本を読んでいる。読むと不思議な感覚に捉われる。タイムスリップして私は五代将軍徳川綱吉、六代将軍家宣の治世の頃に飛んでいく。家宣がまだ甲府藩主だった頃、白石は単なる私塾を営む浪人だったが、推挙されて家宣の儒学の先生となった。その後大地震あり、富士山の噴火あり、江戸の大火あり、幕府は財政難と災難続きである。白石の自宅は二回火事で焼けている。財政対策では、勘定奉行の荻原重秀との戦いになる。

学校では白石が「正徳の治」を行ったと習う。確かに白石が家宣を通して「徳のある治世」を行おうとした気持ちが伝わって来る。とにかく真面目である。真面目さでは私は白石に勝てない。しかし、その生真面目さは他の人の反感を買ったであろう事は容易に予想がつく。実際吉宗が八代将軍になった途端、罷免され、白石の政策は改められた。

白石は自分の生き様を子孫に伝え、子孫が生きて行く上での糧となるように願って書いた。批判される事も多い白石だが、少なくとも



も目指していたのは「民にとって一番良い政治」であった。そんな白石が私の頭の中で問いかけて来る。「お前がやっていることは、患者さんにとって一番良い医療なのか？」と。

しかし、そんなメンターの欠点は私を便秘気味にすることである。

尾山台すくすくクリニック
院長 新井慎一



旅先のメンター 前半

ラパスという場所を知っていますか。南米のボリビアにある都市です。富士山より高い所にあります。夏休みに行ってみました。私は訪問販売のように一軒一軒丁寧にお土産やさんをまわります。それは、お土産の相場を知るためであり、ぼったくられたくはないからの理由です。ある日、お土産と一緒に楽器を売っている店に入りました。

南米の音楽で欠かせない楽器が並んでおり、笛の先にビーズで装飾された楽器を見つけました。ケーナという楽器です。見た目は日本の尺八に似ています。この楽器は見た事があります。小学生の時、音楽の先生が「コンドルは飛んで行く」をこのケーナという楽器を使って奏でてくれました。私にとってはとても懐かしい楽器です。

このケーナを旅行中に弾けるようになったら格好いいと思い購入しました。早速、ユースホステルに戻り、誰もいない部屋で、ひっそりと吹きます。音がでません。ウンともスンとも言いません。聞こえてくるのは私の息だけです。ひっそりする必要はまったくありませんでした。早くあの音を奏でて癒されたいです。もしかしたら、ホームシックになり涙が出てしまうかもしれません。

ケーナの吹き方の本も付属でついてきました。指の押さえ方など写真を見て真似ねますが、いっこうに音が出ません。「わからない事があったらどうする?」『プロに聞く!』よく生徒達に言っていたのを思い出しました。

次の日、ケーナの吹き方を教えてくれる人を探しに町に出ました。

スペイン語も満足に話せません。あるのは、「今日絶対吹き方を教えてくれる人を見つける」という思いだけでした。

まず、手がかりとしては、付属本の中に書かれているミュージックスクールらしき場所です。ラパスの町を歩くのは大変です。高度が富士山より高いのですぐ息が切れます。運良くそのミュージックスクールを見つける事ができたとしても、たどり着いた時には虫の息になっている事でしょう。

そんな事を思いながら、排気ガスが充満している町中を歩きます。街には多くの日本車が走っています。日本車というと、ホンダとかトヨタとかを想像するかもしれませんが、私が言っている日本車は「OO工業株式会社」「XXXX鉄鋼」など会社の名前がバンの横に書かれている車です。どうやら、ペルーのフジモリ大統領が日本から車検が通らない車を輸入し、その車がボリビアで使われているようです。日系企業の名前が入った車が乗り合いタクシーとして活躍しています。活躍しているのはいいが、その車から出てくる排気ガスはとんでもなく黒いです。町を数時間ほど歩くだけで、顔が真っ黒になります。僕は肌の色がどちらかというと焼けているほうだ。よく現地の人に間違われます。ペルーに行った時にはペルー人、ベトナムに行った時にはベトナム人。カンボジアに行った時にはカンボジア人。そして、ボリビアでもボリビア人にきっと間違われるに違いない。

間違われるのなら、しっかりケーナくらいは弾けるようになりたい。 後半に続く.....

- 今瀬

